

論文

大学生アスリートのキャリア困難感尺度の作成の試み

並木伸賢¹⁾, 堀野博幸²⁾

¹⁾早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

²⁾早稲田大学スポーツ科学学術院

キーワード: キャリア困難感, 大学生アスリート, 尺度開発, デュアルキャリア, キャリア移行

【抄録】

本研究の目的は, 大学生アスリートのキャリア困難感を測定する尺度(以下, 困難感尺度)を作成し, 信頼性・妥当性を検証することであった。

調査1では, 関東にある大学3校より体育会運動部に所属する216名(平均年齢19.88歳±1.28)より回答を得た。インタビュー調査と先行研究を基に原案28項目を作成し, 項目分析(天井効果・床効果, I-T 相関分析)およびプロマックス回転を用いた探索的因子分析を行った結果, ①競技者以外のキャリアに対する困難, ②競技者としてのキャリアを追求することの困難, ③競技者引退後のキャリア・生活に対する困難の3因子構造16項目が得られた。基準関連妥当性の検証のため相関分析を行ったところ, ②競技者としてのキャリアを追求することの困難と競技パフォーマンスの自己評価に弱い負の相関, ①競技以外のキャリアに対する困難および③競技者引退後のキャリア・生活に対する困難とキャリア成熟度に弱い負の相関が得られた。

調査2では, オンライン調査会社を通じてWebにてアンケートを配布し適切な回答を得た174名(平均年齢19.89±1.14歳)が分析対象となった。基準関連妥当性の検証のため競技者アイデンティティと相関分析を行ったところ, いずれの因子も弱い正の相関が得られた。再検査信頼性について, 2時点で測定した困難感尺度の級内相関係数は $r = .69 \sim .77$ であった。調査1および調査2の困難感尺度のCronbachの α 係数は, $\alpha = .79 \sim .92$ であった。また, 調査1にて得られた因子構造について確認的因子分析を行ったところ, 概ね満足できるモデル適合度が得られた。以上を踏まえ, 困難感尺度には一定の信頼性・妥当性が得られたと考えられた。今後は, 競技者以外のキャリアへの支援のみならず, 本尺度を用いて競技者としてのキャリアに対して彼らがどのように捉えているのか踏まえつつ支援を行うことが重要と考えられた。

スポーツ科学研究, 20, 141-158, 2023年, 受付日:2023年8月1日, 受理日:2023年10月20日

連絡先: 並木伸賢 359-1192 所沢市三ヶ島 2-579-15 早稲田大学スポーツ科学研究科

n_namiki@ruri.waseda.jp

I. 緒言

アスリートに対するキャリア支援は、トップアスリートのみならず大学生アスリートへも実施されるようになってきている (Stambulova and Ryba, 2014; Stambulova et al., 2021). 大学スポーツの振興に関する検討会議 (文部科学省, 2017) では、「学生アスリートにとって大学時代は競技力向上の重要な時期であると同時に、将来社会で活躍するうえで必要なスキルを身につけ、人間形成を図るうえでも重要な時期」であり、大学は「将来に向けたキャリア形成支援を行って社会に送り出すことが重要である」とされている。キャリア支援において重要とされる時期は、大学卒業後にアスリートとして競技に専念しトップレベルを目指す前 (あるいはトップレベルに到達する前) であり (文部科学省, 2014), 大学生アスリートは、競技レベルの高まりに伴う身体的・心理的な適応やライフスタイルの変化への対処だけでなく、将来のスポーツ・競技生活の終わりに向けた準備も求められている (Sum et al., 2017; Wylleman et al., 2016). このような大学生アスリートに対するキャリア支援には、キャリアプランニングに関する研修や講義だけでなく、リーダーシップ養成やライフスキル教育等の支援もみられている (Navarro and Malvaso, 2015).

大学生アスリートのキャリアに関連する調査では、キャリア成熟 (career maturity) などの概念が用いられ、その強さや程度、関連要因が検討されてきた。キャリア成熟は、主に就業・職業に関する「キャリア選択・意思決定やその後の適応への個人のレディネス」として測定・評価されている (坂柳, 1991). キャリア成熟が高いほど、競技からの引退のショックが低減され、次のキャリアへの移行の質が高まる (Park et al., 2013). さらに、競技だけに集中することによる心理的な負荷が軽減されることも指摘されている (Wylleman et al., 2004). 大学生アスリートのキャリア成熟と関連する要因を明らかにすることで、彼らに対する競技からの引退への準備や就業・職業に関するキャリア支援方法が検討されている (Peng et al., 2006). こうしたキャリア成熟に関して、Kornspan (2014) は、大学生アスリートを対象にキャリア成熟について検討し

た研究についてレビューを行い、キャリア成熟の測定は Career Maturity Inventory (CMI) などが用いられていること、キャリア成熟の関連要因として主に 6 つのデモグラフィックデータ (学生アスリートまたは非学生アスリート, 性別, 人種, 学年, 奨学金の有無, GPA, 活動時間), 5 つの心理社会的要因 (競技者アイデンティティ, プロフェッショナル競技への期待, キャリア自己効力感, キャリアの統制の所在, 早期完了型のアイデンティティ) から調査されていることを明らかにしている。デモグラフィックデータにおいては、学生アスリートは非学生アスリートに比べて、男子学生アスリートは女子学生アスリートに比べて、キャリア成熟が低いことが明らかになっている。また、心理社会的要因について 5 つ以上の研究で検討された概念は、競技者アイデンティティとプロフェッショナル競技への期待であったが、どちらもキャリア成熟の妨害要因となる可能性があるとして指摘されている (Kornspan, 2014). 本邦においても、成人キャリア成熟尺度 (坂柳, 1999) やキャリアレディネス尺度短縮版 (坂柳, 2019) が開発され、調査されている。例えば、山本・島本 (2019) は大学柔道選手を対象としてライフスキル (目標設定やコミュニケーションスキルなど日常生活を送る上で重要とされるスキル) とキャリア成熟の関係性を検討したところ、ライフスキルの中でも、目標を設定しその目標を達成しようとする目標達成スキルが個人の属性に関わらず重要であることを明らかにしている (山本・島本, 2019). なお、山本・島本 (2019) においては、キャリア成熟を就業・職業だけに限定せず、人生全体での視点から測定できるキャリアレディネス尺度の下位因子 (人生キャリアレディネス尺度) を使用している。このように大学生アスリートにおけるキャリア成熟に関する研究では、主に競技者以外への就業に向けた準備性を検討しており、彼らのキャリア成熟の促進・阻害要因を特定する研究が行われている。

1. 大学生アスリートがキャリアを考える際に経験する困難に関する先行研究

ここまで大学生アスリートのキャリア支援の重要性およびキャリア成熟に関する先行研究の概略

を示したが、彼らがキャリアを考える際には就業・職業のみならず競技者についても検討しており、それらに関連する困難を抱えている (Kulcsár et al., 2020). 大学卒業後の進路に対する考え方には、競技者(主に競技を通じて収入を得るプロ選手などを指す)を目指す場合と競技者以外の職業に就く場合のどちらかを選ぶような考え方や、競技と競技以外(主に学業)の双方に取り組む考え方などがあり (Ramos et al., 2017; Ryba et al., 2017), これらの進路に対する考え方に附随して困難が生じることが想定される. Sum et al. (2017) は、国際レベルの競技レベルを持つ台湾・香港の学生アスリートに対してインタビュー調査を実施し、プロのアスリートとして職を得ることは難しいため学業に集中したいが時間がないことへの悩みや、自身が将来何をしているか、何ができるか分からないと感じていることを明らかにしている. また国内において Tokuyama (2015) は、国際レベルから地方レベルの日本人の学生アスリート4名に対してインタビュー調査を実施し、プロのアスリートとして活動したいと思っているがその保証がないことへの不安や、競技以外に取り組んだことがなく仕事を得るために何をしたら良いか分からないことへの難しさがあることを示している. このように大学生アスリートは、キャリアを考える際に、競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難と競技者以外のキャリアを考える際に経験する困難を抱えていることが分かる. なお、本研究における困難は、競技者としてのキャリア、競技者以外のキャリアのそれぞれについて考えることや選択することを妨げるような、困っている感覚、負担感、どうしたら良いか分からない状態を指す.

大学生アスリートがキャリアを考える際に経験する困難について、大学生アスリート特有の尺度等が開発され関連要因が検討されているものの、競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難について測定する尺度は少ない. 例えば、Sandstedt et al. (2004) は、下位因子の一つとしてキャリア発達の障壁 (Barriers to career development) が含まれる学生アスリートのキャリア状況尺度 (Student-Athlete Career Situation Inventory ; SACSI) を作成している. この障壁に

は時間のなさ、エネルギーのなさ、情報へのアクセスのしにくさ等が含まれており、競技者以外のキャリアを考えることに対する障壁を測定している. 障壁に対して、講義等で教師や他の学生との議論をしたり交流を深めるなどの大学生活への関与度や、政治や宗教などの深い話をしたり個人的な話を他者とすることなどの社会的な充実体験などが影響することが指摘されている (Cox et al., 2009). また、Chung-Ju et al. (2016) は、同じ尺度を用いて関連要因を検討し、キャリア発達の障壁とキャリア発達の自己効力感 (career development self-efficacy; Sandstedt et al., 2004) に弱い負の相関関係にある事を明らかにしている ($r = -.29, p < 0.01$). また、Ono et al. (2022) は、大学生アスリートのキャリア選択における悩みに関して 5 因子、20 項目から成る尺度を開発している. 5つの因子には、進路決定をした場合に生じることへの悩み、競技のことに集中したいという悩み、競技の継続に関する悩み、スポーツしか出来ないという悩み、情報不足に関する悩みが含まれている. これらの悩みは競技に傾倒していることによって生じる競技者以外のキャリアを選択する際の悩みであり、キャリア選択の自己効力感 (安達, 2001) と中程度から弱い負の相関を示した ($r = -.20 \sim -.47, p < 0.05$). また、競技レベルが高いほど、競技の継続に関する悩みおよび情報不足に関する悩みの2因子が高いことが示されている (Ono et al., 2022).

上記のように大学生アスリートがキャリアを考える際に経験する困難に関連する内容を測定する尺度はいくつかの研究で取り上げられているものの、主に競技者以外のキャリアを考える際に経験する困難に焦点を当てたものが殆どである. つまり、大学生アスリートの競技からの引退または競技以外のキャリアへの移行を妨げる心理、社会的な要因を測定している. 一方で、大学生アスリートがキャリアを考える際には、競技者としてのキャリアおよび競技者以外のキャリアを考えている可能性があることを踏まえると (Ramos et al., 2017; Ryba et al., 2017), 競技者としてのキャリアに対する困難も検討する必要があると考えられる. 競技者以外のキャリアのみを検討することの問題点

として、彼らのキャリアに対する考えの一部しか取り扱うことが出来ず実態に即していないこと、キャリアに関する問題であるにも関わらず競技者および競技者以外のそれぞれのキャリアに対して異なるアプローチを取らざるを得ず、選択や意思決定が遅れてしまうことが挙げられる。競技者としてのキャリアに対しては競技に関わる関係者が、競技者以外のキャリアに対してはキャリア支援スタッフなどの競技以外の関係者が対応することになる。また、競技生活や練習時間に生活を費やすことの多い彼らにとって、それぞれキャリアを検討することは難しく、優先順位の低い選択肢については対応が遅れてしまうと考えられる。それに付随して、競技者以外のキャリアについて関心の低い層への支援の提供も課題となっている (McKnight et al., 2009)。Ono et al. (2022) においては、競技への傾倒を踏まえた競技者以外のキャリア選択における悩みを扱っているが、本研究では競技者および競技者以外のキャリアを扱うことで、それぞれのキャリアへのアプローチが可能になると考えられる。そのため、競技者以外のキャリア(主に就業に関連するキャリア)のみならず、競技者としてのキャリアについてもキャリアと捉え、彼らの抱える困難について検討する必要があるといえる。

2. 大学生アスリートが競技者としてのキャリアを考える際の困難と関連要因

大学生アスリートが、競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難について記述した研究は多くはないが、競技者になることの難しさ、なったととしても継続できない可能性、身体的・心理的に準備が出来ていないこと、さらには、競技者を引退した後の生活の不透明さなどが挙げられている (Tokuyama, 2015; Morris et al., 2017)。また、Namiki and Horino (2023) は、大学生アスリートに対するインタビュー調査を実施し、競技者としてのキャリアの選択における障壁および競技者以外のキャリアの選択における障壁、対人・環境に関する障壁について示している。競技者としてのキャリアの選択における障壁には、競技者になることへの門の狭さや自身の競技者としての能力の不透明さ、競技者になることの自信や決意の低

下などを含む、競技者としてのキャリアを追求することの困難と、競技者の生活や引退後のキャリアへの心配、怪我や実力不足による早期引退への不安などを含む、競技者生活中および競技者を引退した後の生活やキャリアへの不安が示されている。

このような競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難と関連する要因として、競技レベルおよび競技者アイデンティティが考えられる。競技レベルが高い方が、競技者としてのキャリアを歩むことが出来る可能性が高まるとされており (Johnston et al., 2018)、競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難が低いことが想定される。具体的には、競技レベルが高いほど、競技者としてのキャリアを追求することの困難 (Namiki and Horino, 2023) が低いことが考えられる。そこで本研究では、競技パフォーマンスに対する自己評価測定尺度 (上野・小塩, 2015) を用いて競技レベルを測定する。この尺度は、デモグラフィックデータで得られる競技レベル (全国大会出場など) が、競技種目によって異なる可能性を指摘し、競技種目に関係なく競技レベルの高さを測定することが出来るとされる。

また、競技者アイデンティティは、アスリートとしての役割に自身を同一視している程度とされ (Brewer et al., 1993; Lochbaum et al., 2022)、競技者アイデンティティが高いほど、キャリア成熟が妨げられることが示されている (Houle and Kluck, 2015; Kornspan, 2014; Moiseichik et al., 2019)。競技者としての役割に自身を同一視しているほど、競技以外の活動 (教育や競技以外のキャリアの探索、その他のライフスタイル) への関心が減り、キャリア成熟が進まない可能性が指摘されている (Chung-Ju et al., 2016)。このことを踏まえると、競技者アイデンティティが高いほど、競技のキャリアに関する困難の中でも競技者を引退した後の生活やキャリアに対する困難 (Namiki and Horino, 2023) が高まると考えられる。

3. 本研究の目的と構成

以上の先行研究を踏まえ、本研究では、大学生アスリートがキャリアを考える際に経験する困難

を測定する尺度を開発し、その信頼性・妥当性を検討することを目的とする。具体的には、先行研究で指摘されている競技者以外のキャリアを考える際に経験する困難だけではなく、競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難を含めた尺度を作成する。本研究によって、先行研究で指摘されている競技者以外のキャリアへの移行を妨げるような困難のみならず、競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難を扱うことで、大学生アスリートのキャリアに対する考え方の深化および彼らへのキャリア支援の一助となると考えられる。なお、本研究における困難は、競技者としてのキャリア、競技者以外のキャリアのそれぞれについて考えることや選択することを妨げるような、困っている感覚、負担感、どうしたら良いか分からない状態を指すことから、これらのキャリアを考え選択することを妨げるものとして機能すると想定し、大学生アスリート全体に適応可能であると考えている。

本研究は、大きく2つの調査から成り立つ。調査1では、大学生アスリートがキャリアを考える際に経験する困難を測定する尺度の項目の選定と因子構造の検討、内的整合性の検討を行う。また、基準関連妥当性の検討としてキャリア成熟度(キャリアレディネス尺度尺度短縮版)・競技レベル(競技パフォーマンスに対する自己評価尺度)との関連を検討する。調査2では、調査1にて示された項目群を用いて、基準関連妥当性および再検査信頼性、構成概念妥当性の検討を行う。基準関連妥当性については、競技者アイデンティティ(学生競技者アイデンティティ尺度)との関連性を検討し、再検査信頼性では、2時点での測定を行い級内相関係数を算出する。構成概念妥当性の検討においては、調査1の探索的因子分析において得られた項目群を用いて確認的因子分析を行い、適合度を評価する。調査を2回に分けて基準関連妥当性を検討した理由として、調査対象者の回答負担の軽減および、調査1のみでは検討しきれない基準関連妥当性の補強(Johles et al., 2020)を行った。

なお信頼性について、内的整合性および再検査信頼性はそれぞれ.70以上であれば適切とみ

なされるとされており(Hogan, 2015; 小塩, 2016)、本研究でも同様の基準を用いて判断した。また、基準関連妥当性について先行研究を踏まえ、(1)キャリア成熟度は競技者以外のキャリアを考える際に経験する困難と負の相関(Chung-Ju et al., 2016; Ono et al., 2022)、(2)競技パフォーマンスの自己評価は競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難(特に競技者のキャリアを追求することの困難に関連する因子)と負の相関(Johnston et al., 2018)、(3)競技者アイデンティティは競技者以外のキャリアを考える際に経験する困難および競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難(特に競技者を引退した後の生活やキャリアに対する困難に関連する因子)と正の相関(Houle and Kluck, 2015; Kornspan, 2014; Moiseichik et al., 2019)が得られると仮説を立てて検証を行った。相関係数は、 $r = \pm .20$ 以上を基準として判断した(小塩, 2018; 竹村ほか, 2013)。また、構成概念妥当性の検討において、モデルの適合度の評価は、Goodness of Fit Index (GFI), Adjusted Goodness of Fit Index (AGFI), Comparative Fit Index (CFI), Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA)により検討した。GFI, AGFI, CFIは0から1までの値を取り、 $GFI \geq AGFI$ かつ値が1に近いほど説明力のあるモデルであると言われている(小塩, 2018)。GFIとAGFIは.90以上、RMSEAは.05以下であるとモデルの適合度が良い(.08以下の場合には許容範囲)とされている(安藤ほか, 2005; 小松, 2007)とされている。

II. 調査1: 大学生アスリートのキャリア困難感尺度の作成と内的整合性・基準関連妥当性の検討

1. 調査1の概略

調査1では、大学生アスリートがキャリアを考える際に経験する困難を測定する尺度を作成するために、先行研究を踏まえて原案となる項目群を作成した上で、関東にある4年制大学の体育会運動部に所属する学生アスリートを対象にアンケート調査を行った。得られた回答から、項目の選定、因子構造の検討、内的整合性の検討、基準

関連妥当性(キャリア成熟度, 競技パフォーマンスの自己評価との関連)の検討を行った。

2. 調査1の方法

1) 調査対象者および調査手続き

2022年4月～2022年11月において, 関東にある4年制大学3校より調査の協力を得た。部活動の前後に研究者から直接研究について説明して紙のアンケート用紙を配布, または部活動の指導者に対して研究者が説明を行い指導者を通して配布した。研究の概要と回答は任意であり回答しなくとも不利益はないこと等について, 口

頭で説明およびアンケートの表紙に記載し, 同意を得た対象者に対して調査を実施した。体育会運動部に所属する1年生～4年生の大学生アスリート 237名から調査の協力を得た。因子構造の検討の際に記入漏れ・不備があった回答(21名)を除き, 216名(男性113名, 女性99名, 不明4名; 平均年齢 19.88±1.28歳)を分析対象者とした(Table 1)。その後, 妥当性の検討において記入漏れ・不備のあった回答(4名)を除き 212名(男性111名, 女性97名, 不明4名; 平均年齢 19.88±1.29歳)が分析対象者となった。

Table 1 調査1の対象者の記述統計量 (N = 216)

平均年齢(標準偏差)	19.88 (1.28)歳		
性別		競技成績	
男性	113 人	全国大会ベスト4以上	45 人
女性	99 人	全国大会出場以上	40 人
不明	4 人	地域大会出場以下	129 人
専門競技		不明	2 人
サッカー	107 人	競技者への希望	
ソフトボール	8 人	強く目指している	39 人
テニス	9 人	やや目指している	32 人
バスケットボール	35 人	あまり目指していない	51 人
バレーボール	35 人	全く目指していない	94 人
ラグビー	11 人		
陸上	11 人		

2) 調査項目

調査項目はデモグラフィックデータ, 大学生アスリートのキャリア困難感尺度, 基準関連妥当性を検討するための既存尺度で構成された。

- ① デモグラフィックデータ: 年齢, 性別, 競技種目, 競技成績, 競技者を目指している程度(全く目指していない, あまり目指していない, やや目指している, 強く目指しているのいずれかに回答)について尋ねた。
- ② 大学生アスリートのキャリア困難感尺度(以下, 困難感尺度): 第一著者が行ったインタビュー調査(Namiki and Horino, 2023)および先行研究(Ryba et al., 2017; Sum et al.,

2017; Tokuyama, 2015)を基に, 原案の28項目を作成した。インタビュー調査は大学生アスリート12名に対して各50分程度実施され, 現在のキャリア(進路)に対する考えやそれに向けて取り組んでいること, 困っていること, サポートや支援環境を尋ねる質問を行い回答を得た。先行研究(Ramos et al., 2017; Ryba et al., 2017)において, 大学生アスリートは競技者としてのキャリアおよび競技者以外のキャリアを考えていることが示されており, それらの考えに附随する困難を抽出した。また, 先行研究においても, 競技者としてのキャリアおよび競技者以外のキャリアを考える

際の語りや例示に着目し、関連する内容を抽出した。作成にあたってスポーツ科学を専攻する大学院生 5 名、スポーツ心理学を専門とする教授1名と、大学生アスリートがキャリアを考える際に経験する困難を測定する項目が不足していないか、回答のしやすさや表現について協議を行った上で策定した。「競技者または競技者以外のキャリアを選択する上での難しさについてお聞きします。以下の質問に対して、ご自身の考えに最も近いものをお答えください。」という教示のもと、「全く当てはまらない」から「よく当てはまる」の 5 件法で回答を得た。なお、競技者について「競技を主な仕事としたり、主に競技から収入を得ている、プロ選手(プロのない競技は実業団選手等)」を指すこと、キャリアについて「競技者を除く仕事・職業・就業に対する将来の考え・計画」を指す旨を教示文に添えて示した。

- ③ キャリアレディネス尺度短縮版(坂柳, 2019):坂柳(1999)を基に高校生・大学生のキャリア成熟度を簡便に測定するために作成され、職業キャリアレディネス尺度と人生キャリアレディネス尺度の2つの尺度から成る。職業キャリアレディネス尺度は(競技者以外の)職業・就業を想定する質問項目が多く、大学生アスリートのキャリアに対する考えを適切に測定できないと考えたこと、および先行研究を踏まえて職業生活のみならず人生全体の観点からのキャリア成熟度を測定する必要があること(山本・島本, 2019)を踏まえ、本研究においては人生キャリアレディネス尺度を用いて調査を実施した。本尺度は、3因子9項目から成り、人生のキャリアに対する関心性(例:これからの人生や生き方について、とても興味を持っている)、自律性(例:これからの人生は、自分の力で切り開いていこうと思う)、計画性(例:希望する生き方をするための具体的な計画を立てている)を測定する。「全く当てはまらない」から「とても当てはまる」の 5 件法を用いて回答を求めた。

- ④ 競技パフォーマンスに対する自己評価測定尺度(上野・小塩, 2015):スポーツ選手の競技パフォーマンスに対する自己評価を測定するために作成され、1因子3項目から成る。競技パフォーマンスに対する自己評価を自信(私は、自分の競技能力に自信を持っている)、満足(私は、満足したパフォーマンスを行なえている)、納得(私は、試合で自分の納得できる良い成果を残せている)という側面から測定する。「全く当てはまらない」から「とても当てはまる」の 5 件法を用いて回答を求めた。

3) 分析方法

① 項目分析

困難感尺度の各項目について、天井効果・床効果を検討するために、各項目の平均値 ± 1 標準偏差を算出した(牛来ほか, 2022)。また、各項目の全体との相関関係を検討するために、各項目のI-T相関分析を行い、相関係数を算出した。

② 因子構造の検討

困難感尺度の構成概念を明らかにするため、プロマックス回転を用いた最尤法による探索的因子分析を行った。因子数については、固有値1以上を基準とし、スクリー基準および因子の解釈可能性の観点を踏まえて決定した。項目の採択にあたっては因子負荷量.35を基準としてそれ以下の項目を削除した。

③ 内的整合性の検討

困難感尺度の内的整合性を示す Cronbach の α 係数を算出した。

④ 基準関連妥当性の検討

困難感尺度の基準関連妥当性の検討として、困難感尺度の合計得点・各下位因子とキャリアレディネス尺度短縮版および競技パフォーマンスに対する自己評価測定尺度で、Pearson の積率相関係数を算出した。なお、分析には IBM SPSS Statistics version 28 を用いた。

4) 倫理的配慮

調査実施前に、研究者または指導者から回答には自由意志が尊重され回答しないことで不利益を受けることはないこと、調査は匿名で実施するものであり回答内容が特定されることはないこと、回答の提出をもって同意とみなすこと等を口頭にて説明し、アンケート冊子にも記載して実施した。なお本研究は、調査 1 および調査 2 ともに早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された(承認番号: 2021_459)。

3. 調査1の結果

1) 対象者の特徴

約 40% (85 名) の大学生アスリートが全国大会以上に出場しており、32% (71 人) が卒業後に競技者としての進路への希望を持っていた。競技種目は、サッカー、ソフトボール、テニス、バスケットボール、バレーボール、ラグビー、陸上競技であった (Table 1)。

2) 項目分析

原案 28 項目において天井効果・床効果を確認し、平均値±1標準偏差の得点範囲を超えた9項目を削除した(天井効果:「競技者になることは、自分の競技力が足りず難しいと思う($M = 4.04$, $SD = 1.07$)」, 床効果:「競技者以外のキャリアを考えることにためらいがある($M = 2.11$, $SD = 1.26$)」, 「競技者以外に、将来やりたい仕事や、なりたい職業がない($M = 2.22$, $SD = 1.39$)」, 「競技者以外のキャリアについて相談出来る人がいない($M = 2.01$, $SD = 1.14$)」, 「競技者以外のキャリアについて同じ考えの人が周囲にいない($M = 2.176$, $SD = 1.183$)」, 「自分が選択しようとするキャリアについて、周囲の人から反対されるだろう($M = 1.82$, $SD = 1.10$)」, 「所属している部活動では、競技者以外のキャリアを考える雰囲気がない($M = 1.78$, $SD = 0.97$)」, 「生活の大半を競技に捧げているので、競技者以外のキャリアを考えることが難しい($M = 2.19$, $SD = 1.31$)」, 「部活動が忙しく、競技者以外のキャリアを考える余裕がない($M = 2.13$, $SD = 1.21$)」)。続いて、I-T 相関分析によって、全

体と項目の得点に相関関係がみられなかった 1 項目(「一緒に活動していた人が競技者となり、自分もそうなれると思う」)を削除した($r = -.01$, $p = .90$)。

3) 因子構造の検討

項目分析にて削除された 10 項目を除く 18 項目について探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。なお、因子分析のサンプルサイズに関しては、尺度を評価するための指針として COSMIN(COnsensus-based Standards for the selection of health Measurement INstruments)があり、これに基づくと少なくとも 100 名以上かつ、原案 28 項目の場合は 196 名以上、項目分析後の 18 項目の場合は 126 名以上のサンプルサイズの確保が目安とされており、基準を満たすと考えられた (Terwee et al., 2012)。また、Kaiser-Meyer-Olkin (KMO) の標本妥当性は、0.85、Bartlett の球面性検定は有意であったことから ($p < .001$)、因子分析の適応が可能であると判断した。

因子数の決定の際、固有値 1 以上を基準として 3 因子構造を採用した(固有値: 4.97, 3.16, 1.22, 0.99...)。因子負荷量が .35 を下回る項目を削除して分析を行った結果、16 項目が抽出された(以下 2 項目削除:「競技者になることを諦めた場合、競技へのモチベーションの維持が難しいと思う」, 「競技者以外のキャリアを考えていては、競技者にはなれないと思う」)。探索的因子分析の結果を Table 2 に示した。

第一因子は 7 項目から成り、「競技者以外のキャリアプランを立てることが難しい」, 「競技者以外のキャリアを歩む場合に、今何をすれば良いか分からない」などの項目から構成されていることから、『競技者以外のキャリアに対する困難』と命名された。

第二因子は 6 項目から成り、「競技者になるために、今なにをすべきか分からない」, 「競技者としての覚悟が足りていないと思う」などの項目から構成されていることから『競技者としてのキャリアを追求することの困難』と命名された。

第三因子は 3 項目から成り、「競技者を終えた

あとのキャリアについての情報が不足している, 「競技者を終えたあとのキャリアに不安がある」などの項目から構成されていることから『競技者引退後のキャリア・生活への困難』と命名された。

Table 2 大学生アスリートのキャリア困難度尺度の探索的因子分析の結果(再尤法, プロマックス回転)

	平均	標準偏差	因子負荷量		
			第一因子	第二因子	第三因子
全体 ($\alpha = .84$)					
第一因子: 競技者以外のキャリアに対する困難 ($\alpha = .84$)					
競技者以外のキャリアプランを立てることが難しい	2.38	1.31	.86	.00	-.03
競技者以外のキャリアを歩む場合に, 今何をすれば良いか分からない	2.50	1.29	.84	.09	-.01
競技者以外に, 将来やりたい仕事ややりたい職業を絞ることが難しい	2.60	1.37	.68	-.13	.12
現在取り組んでいる競技と, 競技者以外のキャリアの関連性が分からない	2.69	1.22	.66	.06	-.13
競技者以外のキャリアを考えることは大変そうだ	2.43	1.35	.59	-.18	.10
就職するとして, どのような仕事自分が合っているのか分からない	3.05	1.34	.57	-.07	.19
身近に, 競技者以外のキャリアの手本(理想像)となる人がいない	2.23	1.22	.43	.29	-.15
第二因子: 競技者としてのキャリアを追求することの困難 ($\alpha = .79$)					
競技者になるために, 今なにをすべきか分からない	2.50	1.16	.01	.76	-.10
競技者になることができる基準が分からない	2.98	1.26	.10	.67	-.05
競技者としての覚悟が足りていないと思う	3.21	1.35	-.07	.65	.07
競技者として通用するかどうかわからず不安だ	3.48	1.27	-.01	.56	.14
競技者の環境・生活についての情報が不足している	3.19	1.20	.06	.43	.24
競技者としての生活が大変そうだ	3.76	1.19	-.18	.40	.16
第三因子: 競技者引退後のキャリア・生活に対する困難 ($\alpha = .88$)					
競技者を終えたあとのキャリアについての情報が不足している	3.40	1.23	.07	-.01	.85
競技者を終えたあとのキャリアに不安がある	3.29	1.32	-.05	.13	.80
競技者になったあと, 怪我や実力不足で早期に解雇・引退した場合にどうすれば良いか分からない	3.34	1.34	.03	.07	.75
因子間相関					
	第一因子	第二因子	第三因子		
第一因子	-	.10	.36**		
第二因子		-	.53**		
第三因子			-		

Note: ** $p < .01$

4) 内的整合性の検討

大学生アスリートのキャリア困難感尺度の内的整合性について, Cronbach の α 係数を算出した。その結果, 困難感尺度合計点で $\alpha = .84$, 第一因子で $\alpha = .84$, 第二因子で $\alpha = .79$, 第三因子で $\alpha = .88$ であった。

5) 大学生アスリートのキャリア困難感尺度の基準関連妥当性の検討

基準関連妥当性の検討のため, 困難感尺度の合計点・各下位因子とキャリアレディネス尺度短縮版および競技パフォーマンスに対する自己評価測定尺度で Pearson の積率相関係数を算出した結果 (Table 3), キャリアレディネス尺度短

縮版においては、第一因子(競技者以外のキャリアに対する困難)、第三因子(競技者引退後のキャリア・生活への困難)、および困難感尺度合計点においてそれぞれ有意に弱い負の相関であり、

競技パフォーマンスに対する自己評価測定尺度では、第二因子(競技者としてのキャリアを追求することの困難)と有意に弱い負の相関がみられた。

Table 3 調査1の相関分析の結果

	第一因子	第二因子	第三因子	合計
キャリア成熟度合計	-.25 **	-.17 *	-.24 **	-.30 **
キャリア関心性	-.20 **	-.16 *	-.21 **	-.25 **
キャリア自律性	-.25 **	-.17 *	-.15 *	-.27 **
キャリア計画性	-.22 **	-.13	-.28 **	-.28 **
競技パフォーマンス	-.02	-.24 **	-.04	-.13

Note : * $p < .05$, ** $p < .01$

Ⅲ. 調査 2: 大学生アスリートのキャリア困難感尺度の基準関連妥当性・再検査信頼性の検討

1. 調査 2 の概略

調査 2 では、調査 1 にて作成した大学生アスリートのキャリア困難感尺度について、オンライン調査会社を通じてアンケート調査を実施し、調査 1 のみでは検討できていない基準関連妥当性(競技者アイデンティティとの関連)の検討と再検査信頼性、構成概念妥当性の検討を行った。また、再検査信頼性は、調査 2 の対象者に対して 1 か月後に再度測定を行い、級内相関係数を算出した。

2. 調査 2 の方法

1) 調査対象者および調査手続き

2023 年 3 月にオンライン調査会社を通じて Web にてアンケートを配布した。第一段階で大学運動部に所属する学生の選定、第二段階としてアンケート調査の実施を行った。第一段階では、調査会社の保有するパネルのうち 5000 名を対象に、4 年制大学に所属し、体育会運動部に所属する 1~4 年生が回答者となるように対象者への質問を行ったところ 270 名が該当した。第二段階では、270 名に対しアンケートへの協力を依頼し 240 名から回答を得た。240 名のうち、回答を指定する質問を設定し(例:この質問には「2.あまり当てはまらない」を選択してください)、適切に回答できなかった対象者を分析から除外したところ、174 名(男性 57 名, 女性 117 名, 平均年齢 19.89 ± 1.14 歳)が分析対象者となった(Table 4)。

Table 4 調査1の対象者の記述統計量 (N = 174)

平均年齢(標準偏差)	19.89 (1.14)歳		
性別		競技成績	
男性	57 人	全国大会ベスト4以上	4 人
女性	117 人	全国大会出場以上	38 人
		地域大会出場以下	132 人
専門競技		競技者への希望	
陸上競技	18 人	強く目指している	10 人
サッカー	17 人	やや目指している	16 人
テニス	15 人	あまり目指していない	40 人
バレーボール	15 人	全く目指していない	108 人
水泳	12 人		
バスケットボール	11 人		
野球	10 人		
バドミントン	7 人		
弓道	6 人		
剣道	5 人		
卓球	5 人		
ラグビー	4 人		
ソフトボール	4 人		
ダンス	4 人		
ラクロス	4 人		
その他	37 人		

再検査信頼性の検討では, 上記の 174 名のうち 2023 年 4 月(1 か月後)に大学生アスリートのキャリア困難感尺度を再度測定し, 121 名から回答を得た. 回答を指定する質問に適切に回答できなかった 13 名を除外し, 108 名(男性 36 名, 女性 72 名, 平均年齢 19.79 ± 1.13 歳)が分析対象者となった.

2) 調査項目

- ① デモグラフィックデータ: 年齢, 性別, 競技種目, 競技成績, 競技者を目指している程度(全く目指していない, あまり目指していない, やや目指している, 強く目指しているのいずれかに回答)について尋ねた.
- ② 大学生アスリートのキャリア困難感尺度: 調査 1 にて作成した 3 因子 16 項目を用いた.

各項目について天井効果および床効果はみられず, 項目の平均値は 3.07(最大値 3.65~最小値 2.63), 分散は 1.36(最大値 1.52~最小値 1.21)であり, 調査 2 の対象者においても偏りはみられていないと判断した. また, Cronbach の α 係数は, 困難感尺度合計点で $\alpha = .92$, 第一因子で $\alpha = .89$, 第二因子で $\alpha = .84$, 第三因子で $\alpha = .91$ であった.

- ③ 日本語版学生競技者アイデンティティ尺度(萩原ほか, 2020): 学業・競技の 2 側面から学生のアイデンティティを測定する 2 因子 11 項目から成る. 「学生生活を送るうえで, あなたにとって以下の意識はどのくらい重要ですか」という教示文のもと, 本研究では, 競技者アイデンティティを測定する 6 項目(例: 「有

能なアスリートであること」, 「競技成績が良いこと」)を用いた。「全く重要でない」から「とても重要である」の 6 件法を用いて回答を求めた。先行研究において, 競技者アイデンティティとキャリア成熟やキャリア選択の自己効力感について検討する研究はみられる一方で, 学生アイデンティティとの関連要因については検討されていないことが多いことから (Houle and Klunk, 2015; Huang et al., 2016), 本研究においては学生アイデンティティとの基準関連妥当性を検討することは難しいと判断し, 使用しなかった。

3) 分析方法

① 基準関連妥当性の検討

大学生アスリートのキャリア困難感尺度の合計点および下位因子と, 学生競技者アイデンティティ尺度の下位因子である競技者アイデンティティにおいて相関分析を行った。

② 再検査信頼性の検討

2 時点 (2023 年 3 月, 4 月) で測定した大学生アスリートのキャリア困難感尺度の合計得点, 下位因子のそれぞれで級内相関係数を算出した。

③ 構成概念妥当性の検討

調査 1 にて, 抽出された因子を潜在変数, それに属する項目を観測変数としてモデルを作成し, 因子間の相関関係を踏まえて確認

的因子分析を行った。

- ④ 分析には, IBM SPSS Statistics version 28, IBM SPSS AMOS 28 Graphics を用いた。

4) 倫理的配慮

アンケート回答前に, 回答は自由意志が尊重され回答しないことで不利益を受けることはないこと, 調査は匿名で実施するものであり回答内容が特定されることはないこと, 回答の提出をもって同意とみなすこと等を, アンケート回答前の最初の画面に表示した。「同意する」を選択した者のみが, アンケートへの回答を行った。

3. 調査 2 の結果

1) 対象者の特徴

男性 (57 名) に比べ女性 (117 名) の回答者が多く, 全国大会出場者の割合は 24% (42 名) であった。また, 卒業後の競技者への希望についても目指している人 15% (26 名) となっている。専門競技の数は多く, 多様な競技に取り組む学生が対象者となっていた (Table 4)。

2) 基準関連妥当性の検討

基準関連妥当性の検討のため, 困難感尺度と競技者アイデンティティについて Pearson の積率相関係数を算出した。その結果, 困難感尺度合計点および下位因子で, それぞれ有意に弱い一中程度の正の相関関係がみられた (Table 5)。

Table 5 調査 2 の相関分析の結果

	第一因子	第二因子	第三因子	合計
競技者アイデンティティ	.35 **	.25 **	.35 **	.37 **

Note: ** $p < .01$

3) 再検査信頼性の検討

再検査信頼性について, 級内相関係数を算出した。その結果, 困難感尺度合計点で $r = .77$, 第一因子で $r = .70$, 第二因子で $r = .69$, 第三因子で $r = .71$ であった。

4) 構成概念妥当性の検討

困難尺度の因子構造について, 確認的因子分析を行った結果, 適合度は $GFI = .90$, $AGFI = .85$, $CFI = .96$, $RMSEA = .07$ であった。なお, 分析にあたり先行研究 (尾野・岡田, 2014; 董ほか, 2019) を踏まえ, 修正指数が 4 以上を示した

誤差変数の共分散のうち異なる因子間をまたぐものは避け、「競技者以外のキャリアに対する困難」因子内に3箇所、「競技者としてのキャリアを追求することの困難」因子内に5箇所の共分散を設定した。

IV. 考察

本研究の目的は、大学生アスリートがキャリアを考える際に経験する困難を測定する尺度を開発することであった。インタビュー調査および先行研究を踏まえて28項目の原案を作成した。調査1にて項目分析および探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を実施した結果, 3因子構造16項目が抽出された。大学生アスリートのキャリア困難に関して, 項目の内容的側面から, 第一因子(競技者以外のキャリアに対する困難)が競技者以外のキャリアを考える際に経験する困難であると考えられ, 第二因子(競技者としてのキャリアを追求することの困難)および第三因子(競技引退後のキャリア・生活への困難)が競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難と考えられた。第一因子の「競技者以外のキャリアに対する困難」について, 大学生アスリートは競技者以外のキャリアに関して, 将来何が出来るか分からないことや, 将来に向けて今何をしたらよいか分からないことなどの困難を抱えているとされる(Tokuyama, 2015; Sum et al., 2017)。また, 第二因子の「競技者としてのキャリアを追求することの困難」, 第三因子の「競技引退後のキャリア・生活への困難」は, Namiki and Horino (2023)においても指摘されている。以上を踏まえ, 先行研究で示されている通り大学生アスリートは競技者としてのキャリアおよび競技者以外のキャリアに付随する困難を抱えていることが示された(Ramos et al., 2017; Ryba et al., 2017)。以下では, 信頼性, 妥当性の観点から本尺度について考察を行った。

1. 信頼性

本尺度の信頼性に関して, 内的整合性を示すCronbachの α 係数は, 調査1において $\alpha = .79 \sim .88$, 調査2において $\alpha = .84 \sim .92$ であった。調査2において再検査信頼性を検討したところ級

内相関係数は $r = .69 \sim .77$ であったことから, 概ね満足できる信頼性が得られたと考えられた(Hogan, 2015; 小塩, 2016)。

2. 基準関連妥当性

基準関連妥当性に関して相関分析を行った結果, 調査1においてキャリア成熟度, 競技パフォーマンスの自己評価と, 調査2において競技者アイデンティティと概ね想定した通りの関係性がみられた。

1) キャリア成熟度

キャリア成熟度は, 競技者以外のキャリアに対する困難(第一因子)と競技者引退後のキャリア・生活の困難(第三因子)と弱い負の相関がみられた。仮説(1)では競技者以外のキャリアに対する困難とキャリア成熟に関してのみ関連を想定していたことから(Chung-Ju et al., 2016; Ono et al., 2022), 仮説は一部支持されたといえる。なお, 第二因子とは5%水準で有意であったものの, $r = \pm .20$ より弱い関係性であったことから関連はみられなかったと判断した(小塩, 2018; 竹村ほか, 2013)。第一因子は先行研究と同様に競技者以外のキャリアに対する困難を抱えているほど, キャリア成熟が低い可能性があることが示された。一方で, 競技者引退後のキャリア・生活の困難(第三因子)にも関連がみられている。このことに関して, キャリア成熟がキャリア選択・意思決定やその後の適応への個人のレディネスであることを踏まえると(坂柳, 1991), キャリアや進路を考え準備することを通して競技者以外のキャリアを検討するだけでなく, 競技者を引退した後のキャリアや生活もイメージしていることが推察される。特にキャリアレディネス尺度の下位因子であるキャリア関心性やキャリア計画性と関連があり(それぞれ $r = -.20, -.28, p < .01$), キャリア自律性と関連がみられなかったことから($r = -.15, p = .02$), キャリアに対する考え方(自分の力で切り開いていこう)よりも, キャリアに対して関心を持ち情報収集やキャリアプランの立案などの行動を取ることが関連すると考えられる。また, 因子間相関においても, 競技者以外のキャリアに対する困難(第一因子)と

競技者としてのキャリアを追求することの困難(第二因子)には関連はみられなかったが($r = .10, p = .15$), 競技者引退後のキャリア・生活の困難(第三因子)と弱い正の相関がみられている($r = .36, p < .01$). 第三因子の項目は, 競技者を引退した後のキャリアや生活を考えることについての項目から成り, 競技者以外のキャリアを考えることを通して, 競技者を引退した後の生活やキャリアを考えることに繋がる可能性があるといえる. 以上を踏まえると, 当初の仮説とは異なる結果であったが, 第三因子についても妥当な結果であると考えられた.

2) 競技パフォーマンスの自己評価

競技パフォーマンスの自己評価は, 競技者としてのキャリアを追求することの困難(第二因子)と弱い負の相関がみられた一方で, 第一因子, 第三因子との関連はみられなかった. このことは, 仮説(2)を支持する結果となった. 競技パフォーマンスの競技者になることや競技者として活動できることに関する明確な基準はなく将来を予測することが非常に難しいとされており(プティパほか, 2005; Wylleman et al., 2011), 親, 友人, チームメイト, 指導者などの周囲からのサポートや所属している環境・競技環境なども重要な要素となる(Morris et al., 2017). 競技者としてのキャリアを追求することは, 不確実性の高い将来であり予測することが難しいことから自身のキャリアや将来への準備の程度とは関連がみられなかったと考えられる(Lavalley et al., 1997). また, 一般的に競技能力が高いほど競技者・プロ選手に近づくことから(Johnston et al., 2018), 大学生アスリートは, 競技者にとしてのキャリアを追求することに関して将来やキャリアを考え計画を立てて取り組むことよりも, 現在の自身の状態や置かれている環境を踏まえて判断を下していることが考えられる(Jewett et al., 2019).

3) 競技者アイデンティティ

競技者アイデンティティについては全ての因子で弱い正の相関がみられており, 仮説(3)を支持した. 先行研究では競技者アイデンティティが競

技者以外のキャリアへの移行に対する妨害要因として働くことが指摘されている(Houle and Kluck, 2015; Moiseichik et al., 2019). 本研究では, 競技者以外キャリアのみならず競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難とも関連することが示された. このことは競技以外の活動への関心が減ることによってキャリア成熟が進まないこと(Chung-Ju et al., 2016)と関連していることが推察される. つまり, 競技者アイデンティティが高いことで競技活動のみに集中することにより, 競技者以外のキャリアのみならず競技者としてのキャリアを考え選択することさえも妨害されてしまう可能性がある. このことから, 競技者アイデンティティの高い大学生アスリートは, 自身の将来に対して全体的に困難を抱えており, 競技者か競技者以外かといった観点ではなく, どちらのキャリアへもアプローチする必要があると考えられた.

3. 構成概念妥当性

調査2において, 困難感尺度の確認的因子分析を行った結果, AGFI については基準を満たさなかったものの, 先行研究を踏まえモデル適合度は概ね満足できる値であると判断された(栗林・佐藤, 2015; 尾野・岡田, 2014).

4. 本研究のまとめ, 限界と今後の展望

本研究において大学生アスリートのキャリア困難感尺度について, 『競技者以外のキャリアに対する困難』, 『競技者としてのキャリアを追求することの困難』, 『競技者引退後のキャリア・生活に対する困難』の3因子構造16項目から成ることが明らかになった. また, 調査1および調査2を通して本尺度は, 一定の信頼性(内的整合性, 再検査信頼性), 妥当性(基準関連妥当性, 構成概念妥当性)が確認されたと考えられた.

本研究の限界点として, 競技と仕事の両立に関する困難について直接的に含まれていない点が挙げられる. 本研究の主目的として, 競技者としてのキャリアおよび競技者以外のキャリアを考える際に経験する困難を取り上げたが, 卒業後の進路として競技者ではなくとも仕事との両立を図りながら競技を継続する人もいることから(伊藤・

三倉, 2021), 今後は, 仕事や学業, 仕事や競技との両立 (Stambulova et al., 2021) といった観点からの調査も重要と考えられる. 具体的には, 仕事と競技のバランスに対する考え方についての調査を行うことや, 競技のキャリアを考える際に経験する困難 (第二因子, 第三因子) と大学卒業後の働き方との関連を調査することで, 彼らの抱える困難に対する理解が深まると考えられる.

今後の展望として, 本尺度を用いたキャリア支援への適応が考えられる. 特に, 競技者としてのキャリアを考える際に経験する困難については本研究独自の視点であり, 本研究の結果を踏まえると競技者以外のキャリアへの準備や支援のみならず, 競技者のキャリアに関する困難も含め, それぞれに対応が必要といえた. 特に大学生アスリートを支援する担当者は, 競技者以外のキャリアへの移行だけではなく, 競技者としてのキャリアに対して彼らがどのように捉えているのか, 周囲の関係者とはどのようにコミュニケーションを取っているのか, 抱えている問題に対してどのように対処しているのかを確認し, どのように解消することが出来るかについても支援する必要があると考えられる.

付記

本研究は, JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2128 の支援を受けたものです.

V. 文献

- ・ 安達智子 (2001) 大学生の進路発達過程: 社会・認知的進化理論からの検討. 教育心理学研究, 49(3), 326-335. Doi: 10.5926/jjep1953.49.3_326
- ・ 安藤玲子・高比良美詠子・坂元章 (2005) インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響. パーソナリティ研究, 14(1): 69-79.
- ・ Brewer B.W., Van Raalte J.L., and Linder D.E. (1993) Athletic identity: Hercules' muscles or Achilles heel?. *International Journal of Sport Psychology*, 24 (2), 237-254.
- ・ Chung-Ju, H., Chou, C., and Tsung-Min Hung. (2016) College experiences and career barriers among semi-professional student-athletes. *Career Development International*, 21(6), 571-586. Doi: 10.1108/CDI-09-2015-0127
- ・ Cox, R., Sadberry, S., McGuire, R., and McBride, A. (2009) Predicting student athlete career situation awareness from college experiences. *Journal of Clinical Sport Psychology*, 3(2), 156-181. Doi: 10.1123/jcsp.3.2.156
- ・ 董潔・松原耕平・佐藤寛 (2019) 大学生の就職活動不安に与える認知行動的要因の影響. 不安症研究, 11(1), 59-69.
- ・ 牛来千穂子・水落文夫・内山治樹 (2022) スポーツ版チームワーク測定尺度の開発. 体育学研究, 67:961-981.
- ・ Hogan, T. (2015) *Psychological testing: A practical introduction (3rd ed.)*. Wiley: New Jersey p.116.
- ・ Houle, J. and Kluck, A. (2015) An examination of the relationship between athletic identity and career maturity in student-athlete. *Journal of Clinical Sport Psychology*, 9, 24-40.
- ・ Huang, C., Chou, C., and Hung, T. (2016) College experiences and career barriers among semi-professional student-athletes: The influences of athletic identity and career self-efficacy. *Career Development International*, 21(6): 571-586.
- ・ 伊藤真紀・三倉茜 (2021) パラアスリートの職業キャリア形成に影響を与える要因: 心理的資本を援用して. アダプテッド体育・スポーツ学研究, 7(1), 1-10.
- ・ Jewett, R., Kerr, G., and Tamminen, K. (2019) University sport retirement and athlete mental health: a narrative analysis. *Qualitative Research in Sport, Exercise and Health*, 11(3), 416-433. Doi: 10.1080/2159676X.2018.1506497
- ・ Johles, L., Gustafsson, H., Jansson-Fröjmark, M., Classon, C., Hasselqvist, J., and Lundgren, T. (2020) Psychological flexibility among competitive athletes: A psychometric

- investigation of a new scale. *Frontiers in Sports and Active Living*, 2:110. Doi: 10.3389/fspor.2020.00110
- Johnston, K., Wattie, N., Schorer, J., and Backer, J. (2018) Talent identification in sport: A systematic review. *Sports Medicine*, 48, 97–109. Doi:10.1007/s40279-017-0803-2
 - 小松誠 (2007) 旅のはじまり. 豊田秀樹編. 共分
散構造分析 [Amos 編]—構造方程式モデリン
グ—. 東京図書: 東京, pp. 18.
 - Kornspan, A. (2014) Career maturity and
college student-athletes: A comprehensive
review of literature. *Annals of Psychotherapy
and Integrative Health*, 17(3).
<https://works.bepress.com/alankornspan/1/>
 - Kulcsár, V., Dobrea, A., and Gati, I. (2020)
Challenges and difficulties in career decision
making: Their causes, and their effects on the
process and the decision. *Journal of Vocational
Behavior*, 116(Part A): Article103346. ISSN
0001-8791, Doi: 10.1016/j.jvb.2019.103346.
 - 栗林千聡・佐藤寛 (2015) Coach-Athlete
Relationship Maintenance Questionnaire アスリ
ート版のジュニアテニス選手への適用の試み. *ス
ポーツ心理学研究*, 42(2):93-102.
 - Lavallee, D., Grove, R., and Gordon, S. (1997)
The causes of career termination from sport and
their relationship to post-retirement adjustment
among elite-amateur athletes in Australia,
Australian Psychologist, 32(2), 131–135, Doi:
10.1080/00050069708257366
 - Lochbaum, M., Cooper, S., and Limp, S. (2022)
The athletic identity measurement scale: A
systematic review with meta-analysis from 1993
to 2021. *European Journal of Investigation in
Health, Psychology and Education*, 12(9), 1391-
1414. Doi: 10.3390/ejihpe12090097
 - McKnight, K., Bernes, K., Gunn, T., Chorney, D.,
and Orr, D. (2009) Life after sport: Athletic
career transition and transferable skills. *Journal
of Excellence*, 13, 63–77.
[https://opus.uleth.ca/server/api/core/bitstreams/
420b5d84-70dd-4af5-9e92-b2da409a083e
/content](https://opus.uleth.ca/server/api/core/bitstreams/420b5d84-70dd-4af5-9e92-b2da409a083e/content)
 - Moiseichik, Stokowski, S., Hinsey, S., and Turk,
M. (2019) Athletic identity and career maturity
of women’s basketball student-athletes. *The
Journal of SPORT*, 7(1), 4–25. Doi:
10.21038/sprt.2019.0711
 - 文部科学省 (2014) 独立行政法人 日本スポー
ツ振興センター「キャリアデザイン形成支援プロ
グラム」における「スポーツキャリア形成支援体制
の整備に関する実践研究」.
[https://sportcareer.jp/wp-
content/uploads/2021/01/sportcareer_report_jsc
_2014.pdf](https://sportcareer.jp/wp-content/uploads/2021/01/sportcareer_report_jsc_2014.pdf), (参照日 2023 年 7 月 25 日).
 - 文部科学省 (2017) 大学スポーツの振興に関す
る検討会議 最終とりまとめ ～大学のスポーツ
の価値の向上に向けて～ .
[https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/0
05_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/03/
10/1383246_1_1.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/005_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/03/10/1383246_1_1.pdf), (参照日 2023 年 7 月 25
日).
 - Morris, R., Tod, D., and Eubank, M. (2017)
From youth team to first team: An investigation
into the transition experiences of young
professional athletes in soccer. *International
Journal of Sport and Exercise Psychology*, 15(5),
523–539. Doi:
10.1080/1612197X.2016.1152992
 - Namiki, N. and Horino, H. (2023) Career
transition experiences of Japanese university
student-athletes: A qualitative study. *Sport
Sciences Research*, 20, 96-113.
 - Navarro, K. and Malvaso, S. (2015)
Synthesizing research on the contemporary
student-athlete experience: Implications and
recommendations for NCAA student-athlete
development programming. *Journal of College
and Character*, 16(4), 263–269.
 - 小塩真司 (2016) 心理尺度校正における再検査
信頼性係数の評価—「心理学研究に掲載され
た文献のメタ分析から」—. *心理学評論*, 59(1),
68–83.

- ・小塩真司(2018)SPSS と AMOS による心理・調査データ解析(第三版). 東京図書: 東京.
- ・尾野裕美・岡田昌毅(2014)若年就業者におけるキャリア焦燥感の構造: キャリア焦燥感尺度の開発. 産業・組織心理学研究, 28(1):31-41.
- ・Ono, Y., Kaji, M., and Morita, T (2022) A study of the worries that emerge in the career selection of Japanese student athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 22(4),1009–1017. Doi:10.7752/jpes.2022.04128
- ・Park, S., Lavallee, D., and Tod, D. (2013) Athletes' career transition out of sport: a systematic review. *International Review of Sport and Exercise Psychology*, 6(19), 22–53. Doi: 10.1080/1750984X.2012.687053
- ・Peng, H. and Johanson, R. E. (2006). Career maturity and state anxiety of Taiwanese colleges student athletes given cognitive career-oriented group counseling. *Psychological Reports*, 99(3), 805–812. Doi: 10.2466/PR0.99.3.805-812
- ・ブティパ・シャンペーン・チャルトラン・デニツシュ・マーフィー: 田中ヴェルヴェ京・重野弘三郎訳(2005)スポーツ選手のためのキャリアプランニング. 大修館書店: 東京.
- ・Ramos, J., Subijana, C., Barriopedro, M., and Muniesa, C. (2017) Events of athletic career: A comparison between career paths. *Revista de Psicologia del Deporte*, 26(Supplement 4): 115–120.
- ・Ryba, T., Stambulova, N., Selänne, H., Aunola, K., and Nurmi, J. (2017) “Sport has always been first for me” but “all my free time is spent doing homework”: Dual career styles in late adolescence. *Psychology of Sport and Exercise*, 33, 131–140. Doi: 10.1016/j.psychsport.2017.08.011
- ・Sandstedt, S., Cox, R., Martens, M., Ward, D., Webber, S., and Ivey, S. (2004) Development of the student-athlete career situation inventory (SACSI). *Journal of Career Development*, 31, 79–93. Doi: 10.1007/s10871-004-0566-5
- ・坂柳恒夫(1991)進路成熟の測定と研究課題. 愛知教育大学教育科教育センター研究報告, 15, 269–280.
- ・坂柳恒夫(1999)成人キャリア成熟尺度(ACMS)の信頼性と妥当性の検討. 愛知教育大学研究報告, 48, 115–122.
- ・坂柳恒夫(2019)高校生・大学生のキャリア成熟に関する研究—キャリアレディネス尺度短縮版(CRS-S)の信頼性と妥当性の検討—. 愛知教育大学研究報告, 68, 133–146.
- ・Stambulova, N. and Ryba, T. (2014) A critical review of career research and assistance through the cultural lens: Towards cultural praxis of athletes' careers. *International Review of Sport and Exercise Psychology*, 7(1), 1–17. Doi: 10.1080/1750984X.2013.851727
- ・Stambulova, N., Ryaba, T., and Henriksen, K. (2021) Career development and transitions of athletes: The International Society of Sport Psychology Position Stand Revisited. *International Journal of Sport and Exercise Psychology*, 19(4), 524–550. Doi: 10.1080/1612197X.2020.1737836
- ・Sum, R, Tsai, H., Ching, H., Cheng, C., Wang, F., and Li, M. (2017) Social-ecological determinants of elite student athletes’ dual career development in Hong Kong and Taiwan. *SAGE Open*. Doi: 10.1177/2158244017707798
- ・竹村りょうこ・島本好平・加藤貴昭・佐々木三男(2013)スポーツ集団における学生アスリートのセルフマネジメントに関する研究: スポーツ・セルフマネジメント尺度の作成. 体育学研究. 58:483-503.
- ・Terwee, C., Mokkink, L., Knol, D. Ostelo, R. Bouter, L., and de Vet, H. (2012) Rating the methodological quality in systematic reviews of studies on measurement properties: A scoring system for the COSMIN checklist. *Quality of Life Research*, 21, 651–657. Doi: /10.1007/s11136-011-9960-1
- ・Tokuyama, S. (2015) Attitudes of student athletes toward career transition: Preliminary examination with student athletes in Japan.

International Journal of Sport and Health Science, 13, 75–83.

- ・ 上野雄己・小塩真司 (2015) スポーツ選手の競技パフォーマンスに関する基礎的研究: 競技パフォーマンスに対する自己評価測定尺度の作成の試み. 桜美林大学心理学研究, 6, 95–105.
- ・ Wylleman, P., Alfermann, D., and Lavallee, D. (2004) Career transitions in sport: European perspectives. *Psychology of Sport and Exercise*, 5(1), 7-20. Doi: 10.1016/S1469-0292(02)00049-3
- ・ Wylleman, P., De Knop, P., and Reints, A. (2011) Transitions in competitive sports. In: Holt, N., and Talbot, M. (Eds.), *Lifelong engagement in sport and physical activity*. Routledge: New York, pp. 63–76.
- ・ Wylleman, P., Rosier, N., and Knop, P. (2016) Career Transitions. In: Schinke, R., McGannon, K., Smith, B. (Eds.) *Routledge International Handbook of Sport Psychology*. Routledge: New York, pp.111–118.
- ・ 山本浩二・島本好平 (2019) 大学生柔道選手におけるライフスキル獲得がキャリア成熟に及ぼす影響. *体育学研究*, 64, 335–351.